

STIFF LITTLE FINGERS, CHIEFS OF REALITY,  
PHILLIP BOA & THE VOODOO CLUB

PHILLIP BOA & THE VOODOO CLUB — フィリップ・ボア&ザ・ヴードゥー・クラブ

## パンクの影響の中で持続する醒めた感触

まずはめでたい。何かって？ あのフィリップ・ボア&ザ・ヴードゥー・クラブが遂に日本発売されるからだ。フォルやベル・ウブ、ビッグ・ブラックなど優れたバンドが見過ごされてきた状況の中で、これは快挙と言えるし昔からのファンとしては素直に喜びたい。

この西ドイツ出身の奇妙な名前バンドは、'84年に結成されインディ・レーベル、JA / ミュージックよりデビューする。

'85年には、ファースト・アルバム「PHILISTER」を発表し、翌年自らのレーベル、コンストラクターを設立すると共に「ARISTOCRACIE」をリリース。同レーベルではクリスチャンハウンドなど先鋭的なグループを紹介していく一方、ツアーをするなどして西ドイツやイギリスで着実に評価を得ていった彼らは、その後

ポリドールと契約、'88年にはジョン・レッキーをプロデューサーに迎えた「COPPERFIELD」を発表した。

彼らのサウンドの魅力は、初期の攻撃的なナンバーから現在のポップなものまでヴァリエティに富んでいるが、やはりザ・ヴードゥーとデア

して冷たくない) 感触である。彼らはコンストラクターのオムニバス「10 YEARS AFTER THE GOLDEN DRUSH」('87年)というタイトルからもわかるとおり、まちがいにパンクの影響を受けている。そして、それを偏った音楽スタイルや凝り固

まった政治性といった枠で括ることなく、柔軟に自分たちなりに解釈し、表現している現在数少ないバンドの一つだ。

今回日本デビューとなる4作目「ヘアー」は、今までのポップな部分は少し影を消しているが、その醒めた視点は健在だ。それは、あれから13年経つのに状況は変わらないことに対してのあきらめのようなものもあるが、そうではなく寧ろ周囲に対して過剰な期待をせずきっちりスタンスをとっているかのようだ。故に確かな手応えを感じる。頑張れ。大谷英之



の2人によるリズム隊とポップなメロディ・ラインの組み合わせの妙にある。さらに、ピアノのメケタヴォーカルとフィリップ・ボアの鋭角的なギターが切り込んでくるという独自の世界だ。それを支配しているのが、全体にどこか醒めた(かといって決